

日本計量生物学会

ニュース・レター No.49

1994年10月

目次

巻頭言

日本計量生物学会1995, 96年度役員選挙について

第2回計量生物セミナーのお知らせ

第17回国際計量生物学会議の報告

Biometrics の要約

1994年度第2回, 第3回理事会議事録

関連学会等のお知らせ

Japanese Journal of Biometrics へようこそ!!

新雑誌 JABES への投稿のお誘い

会計理事からのお知らせ

事務局からのお知らせ

その他

魚井 徹 (山之内製薬 臨床統計部)
医薬品の承認要件に関するハーモニゼーションの会議で、用量-反応関係を見る試験に関するガイドラインが最終版になり、日本でもこの趣旨に添った指針が出された。

日本では、この種の試験は従来用量設定試験と呼ばれてきており、比較臨床試験や、市販後の治療においてはほぼ一定の用量を定めるための試験として位置付けられてきた。ICHガイドラインでは“有効性ならびに安全性に関して用量-反応関係が描かれているなら、治療の戦略が国によって、あるいは、医師によって異なってもそれぞれの立場で用量を選択できる”として、用量-反応関係を示すことを強調している。

ICHガイドラインでは、治療対象となっている領域の違いに応じて用量選択の方法が異なる点を重視している。緊急に治療を要する重篤な疾患の場合には、有効性のウェイトが安全性に比して高くなるために、比較的高い投与量が選ばれる傾向がある。また、重篤な疾患で有効な治療がない領域では、何等かの用量で有効性が認められれば取り敢えず承認しておいて、市販後に用量-反応関係の情報を追加することも可能であるとしている。

医薬品開発においては、新薬を適正に使用

するための用法・用量ならびにその変更のための情報を集めるとともに、新薬の存在意義をデータから説明することが目的となっている。最近特に、適正使用により患者に優しい治療が求められているが、そのためには医師の求める情報と、臨床試験で収集する情報ならびにその統計的な解析方法の間の調和が必要となる。

このような環境において、臨床家と統計家の間で対話が行われることは極めて有意義であり、統計的検定で有意であるが医学的な評価が不可能という状況などを回避することができる。本年12月4～5日に計画されている第2回計量生物セミナーはこのような対話を目指したものである。

用量-反応情報の議論は、医薬品の有用度評価の方法並びに、昨年のセミナーの主題であった同等性の問題とも関連が深い。用量-反応情報はまた、効率的で失敗しない新薬の開発を行う上でも極めて重要である。疾患毎におよび、開発のステージ毎に用量-反応を見るうえで医学的に適切な指標を定め、適切なデザインを選択することは新薬の開発並びに市販後の実際の治療に貢献することが期待される。

日本計量生物学会1995, 96年度役員選挙について

1994年度総会で、役員の任期を本学会の会計年度である1月から12月に合わせる事が承認されました。この規約改正にともない今年度からは下記の要領で役員選挙を実施いたしますのでお知らせします。

日本計量生物学会1995, 96年度役員選挙要領

1. 本ニュースレターのp.4～9の被選挙人名簿から、理事を3名、監事を1名選出し同封の投票用紙に記入してください。なお、会費を2年以上滞納している人には、選挙権・被選挙権ともにありません。
2. 締切日は1994年10月31日です（消印有効）。
3. 次の投票は無効となります。
 - 1) 所定以外の用紙による投票
 - 2) 理事3名、監事1名を越えて記入した投票
 - 3) 投票者の氏名など余分な記入のある投票
4. 詳しくは、本ニュースレターp.3～4の選挙細則を御覧ください。

日本計量生物学会 選挙管理委員会

委員長 金藤 浩司

委員 矢船 明史

日本計量生物学会会則

（1994年度総会にて承認された改正部分を下線で示した）

[総則]

1. 本会は日本計量生物学会(The Biometric Society of Japan)と称する。
2. 本会の事務局は、原則として庶務理事の所属する機関におく。

[目的及び事業]

3. 本会は生物学・医学・農学その他の関連分野における科学的研究を計量的・数学的・統計的方法を用いて推進するとともに、その研究の普及、研究者相互の交流を促進し、かつ、外国の研究団体との連絡を図ることを目的とする。
4. 本会は前条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。
 - (1) 研究発表会・講演会・シンポジウムの開催
 - (2) 会誌・図書および資料の刊行
 - (3) 外国の関連学会との連絡および協力
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

[会員]

5. 本会の会員は次のとおりとする。
 - (1) 正会員…第3条にあげた研究に従事する者またはそれに関心を有する者
 - (2) 学生会員…大学の学生（大学院をふくむ）あるいはこれに準ずる者
 - (3) 賛助会員…本会の目的に賛同し、その事業に財政的援助をする者または団体
6. 本会に正会員または学生会員として入会しようとする者は、正会員1名の紹介により、理事会の承認を受けなければならない。
7. 会費として正会員は年額8,000円、学生会員は4,500円、賛助会員は一口10,000円以上を毎年1月末日までに納入しなければならない。ただし、国際計量生物学会からの機関誌Biometricsの送付を希望しない者の会費は、正会員・学生会員とも年額3,500円とする。
8. 会費を2年以上滞納した者は、理事会において退会した者とみなすことができる。
9. 会員はつぎの特典を受ける。
 - (1) 本会が刊行する会誌および資料の配布を受けること
 - (2) 本会の行う事業の通知を受けこれらに参加すること

- (3) 会則及び別に定める規則により、本会役員の選挙権および被選挙権を有すること
- (4) 国際計量生物学会の機関誌Biometricsを年4回受領する(ただし前記7のただし書きに該当する者は除く)

[役員]

- 10. 本会に次の役員を置く。
 - (1) 理事若干名、うち1名を会長とする
 - (2) 監事2名
- 11. 理事および監事は正会員のなかから選任する。役員の選任方法については総会で定める。会長は理事会において互選する。
- 12. 会長は本会の業務を総理し、理事会の議長となり、また本会を代表する。理事は理事会を組織し、総会の権限に属する事項以外の事項を議決し、執行する。理事のなかから庶務担当・会計担当および編集担当をそれぞれ1名選任する。
- 13. 本会の役員の任期は2年とし再選を妨げない。ただし、会長は連続して2期4年を越えることはできない。
- 14. 役員に欠員を生じたときは、理事会の議決により後任を補充することができる。後任者の任期は前任者の残りの期間とする。

[会議]

- 15. 本会の会議は総会と理事会とする。総会は通常総会と臨時総会とする。総会は正会員・学生会員および賛助会員のなかの個人会員をもって組織する。理事会は理事をもって組織する。
- 16. (1) 通常総会は毎年1回4月に会長が招集する。
 - (2) 臨時総会は理事会または監事が必要と認めたとき、会長が招集する。また、会長は正会員の10分の1以上から会議の目的を記載した書面による請求があったときは、これを招集しなければならない。
 - (3) 通常総会を招集するには少なくとも6週間以前に、会議の目的である事項、日時および場所を記載した書面をもって会員に通知しなければならない。
- 17. 通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は出席正会員の互選によって定める。
- 18. 総会はこの会則で定めるもののほか、次の事項について議決する。

- (1) 事業計画および収支予算についての事項
 - (2) 事業報告および収支決算についての事項
 - (3) その他本会の運営に関する重要な事項
- 19. (1) 総会は正会員現在数の5分の1以上の者が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事につき、あらかじめ書面をもって意思を表示した者または表決の委任者は出席者とみなす。
 - (2) 総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
 - 20. 理事会はこの会則に定めるもののほか、次の事項について議決する。
 - (1) 総会に提案すべき事項
 - (2) 会務の執行に関する事項
 - (3) その他会長が必要と認めた事項

[会則の変更および解散]

- 21. 本会則の改正には総会において出席者の3分の2以上の議決を経なければならない。

[補則]

- 1. 本学会は国際計量生物学会IBSの日本支部を兼ねる。会長、庶務理事、会計理事はそれぞれ同支部のPresident, Secretary, Treasurerを兼務する。
- 2. IBSのCouncil memberは本学会の理事に就任する。
- 3. 1991年度の会費は現行のままとし、上記7.の会費は1991年度より施行する。
(正会員8,000円、学生会員4,500円)

日本計量生物学会役員選出に関する細則

(総則)

- 1. 本会の役員の選出、および委嘱等は会則のほか、この細則の決めるところによる。
- 2. 理事の定数は、当分の間20名以内とする。ただし、そのうちの15名の選出は正会員の選挙による。ほかは選挙後の当選人による連絡会議に於て必要に応じて推薦により追加するものとする。
- 3. 監事は2名とし、選出は正会員の選挙による。ただし、理事は監事を兼ねることができない。
- 4. 会長、庶務理事、会計理事は理事会が理事の

- 中から互選し、総会の承認を経て選出する。
- 各種委員会の委員は、理事会において委員長を理事の中から委嘱し、他は正会員の中から選考し、委嘱する。
 - 役員の任期は、1月1日から12月31日までの2年間とする。ただし、中途就任の役員の任期は、就任の日から前記の期間とする。
(理事および監事の選挙)
 - 理事および監事は、郵送による無記名投票によるものとする。
 - 選挙を公正、かつ円滑に進めるために、選挙管理委員会を設置し、その管理下で実施する。
 - 理事および監事の選挙人と被選挙人は、選挙年の10月1日現在、正会員であるものに限る。
 - 選挙方法等は、選挙管理委員会内規として別に定める。
(当選者の就任)
 - 理事および監事に当選したものは、原則として就任を辞退できない。
(追加理事の推薦)
 - 理事の当選人は選挙直後に連絡会議を開催し、必要に応じて推薦理事5名以内を選出することができる。
 - 推薦理事の選出は、会則の補則2条によるものの他は、当選理事の専攻分野と地域性等を配慮して行う。
(三役の選出)
 - 会長、庶務理事、会計理事の選出は、選挙後の第1回理事会で選出する。ただし、理事会における選出方法は出席理事（委任状提出者も含む）の互選による。

日本計量生物学会選挙管理委員会内規

- 選挙管理委員会（以下、委員会）は、理事会が正会員の中から委嘱する委員長1名、委員1名により構成される。
- 委員会は、選挙日程（投票締切日、開票日など）、選挙人および被選挙人の資格条件等を決定し、有資格の正会員に告示し、選挙を実行する。
- 投票は、郵送による無記名投票とし、委員会が定めた投票用紙により、理事3名、および監事1名を投票する。

- 所定の用紙以外による投票や、差出人（投票者）の氏名を記した投票は無効とする。
- 投票用紙の送付に際しては、以下の事項を含む文書を選挙人の便に供するため添付する。
(1) 選挙人および被選挙人の資格、投票の郵送先、投票締切日、投票の有効性などの概要
(2) 被選挙人名簿
(3) その他、委員会が必要と認める事項
- 開票作業は、選挙管理委員会が行う。
- 当選人の決定は、以下の規則に従うものとする。
(1) 理事は、有効投票の最多数の得票者から順に上位15名を当選人とする。
(2) 監事は、有効投票の最多数の得票者から順に、理事の当選人以外の上位2名を当選人とする。
(3) 理事、監事の当落の境界に同数の得票者があり、定数を越える時は、委員会が抽選で選ぶ。
(4) 当選人の決定に関して疑義が生じた場合は、そのつど委員会に於いて決定する。
- 開票後、委員会は当選人に当選の旨をすみやかに通知する。また、委員長は、理事会に対して以下の報告書を提出する。
(1) 投票締切日、開票日時および場所
(2) 有権者総数、有効投票人数、無効投票人数、有効記名数
(3) 理事、監事の当選人の氏名、得票数の一覧表
- 委員会の任務は、当選人への通知と理事会への報告書提出をもって終わりとする。

日本計量生物学会被選挙人名簿

(1994-10-1 現在)

相澤 淳	エムジエン(株)
赤澤 宏平	九州大学医学部付属病院医療情報部
浅井 晃	東洋大学経済学部
浅井 清朗	名古屋経済大学法学部
浅野 弘明	京都府立医科大学衛生学教室
安達 毅	日本臓器製薬(株)開発一部
安達 健	森永乳業(株)生物科学研究所
安部 一郎	立教女学院短期大学
天野 秀紀	(財)東京都老人総合研究所

有田清三郎	関西医科大学教養部	大瀧 慈	広島大学原医研
安藤 正一	山之内製薬(株)	大竹 正徳	放射線影響研究所
安楽 和夫	西南学院大学文学部	大塚 雍雄	新潟大学農学部
飯嶋 弘	キッセイ薬品工業(株)	大塚 芳正	日本ロシユ(株)
飯田 一郎	(株)小林コーサー研究所	大槻 成章	呉羽化学工業(株)
飯塚 悦功	東京大学工学部	大槻 徹	住友製薬(株)
池田 正人	産業医科大学産業保健経済学教室	大友 栄松	東京国際大学教養学部
石井 丈夫		大野 長壽	大正製薬(株)
石川 和明	バイオスタット(株)	大橋 靖雄	東京大学医学部
石川 亮介	海外新聞普及(株)	岡 健司	(株)日本海洋生物研究所
石栗 秀	日本甜菜精糖(株)清水工場	緒方 昭	鈴鹿医療科学技術大学
石塚 直樹	クインタイルズ・アジアインク	緒方 裕光	国立公衆衛生院
石野 得三	山之内製薬(株)	尾形 良彦	統計数理研究所
石間 紀男	食品総合研究所	岡本 直幸	神奈川県立がんセンター臨床研究所
伊津野 孝	東邦大学医学部	丘本 正	追手門学院大学経済学部
伊豆本 透	サンド薬品(株)	小川 幸男	日本商事(株)
磯 博康	筑波大学社会医学系	奥 喜正	流通経済大学流通問題研究所
市川 雅教	東京外国語大学	奥住 幸雄	アップジョンファーマシユウティ
伊藤 孝一	南山大学		カルズリミテッド(株)
伊藤 博之	ファイザー製薬(株)	奥野 忠一	東京理科大学経営学部
伊藤 要二	日本シェーリング(株)	小澤 賢一	キッセイ薬品工業(株)
稲垣 宣生	大阪大学基礎工学部	尾島 善一	東京理科大学理工学部
稲田 紘	国立循環器病センター研究所	織田健次郎	中国農業試験場
稲田 充男	島根大学農学部	越智 義道	大分大学工学部
猪原 正守	大阪電気通信大学	斧田太公望	
井村 治	農業環境技術研究所	折笠 秀樹	自治医科大学付属大宮医療センター
井本 精一	(株)化合物安全性研究所		
井山 審也	Universiti Pertanian Malaysia	鍵村 達夫	日本ベーリンガーインゲルハイムkk.
祝崎 博明	新潟大学農学部	景山 三平	広島大学学校教育学部
岩崎 正和	バイエル薬品(株)	柏木 渉	大鵬薬品工業(株)
岩崎 学	成蹊大学工学部	片山 和夫	塩野義製薬(株)
鰐 宏藩	Institute of Botany Academia Sinica	門山 允	東京国際大学商学部
上坂 浩之	ヘキストジャパン(株)	金澤雄一郎	筑波大学社会工学系
上原 秀昭	(株)ツムラ	金森 雅夫	東邦大学医学部
上村 一夫	流通経済大学	金藤 浩司	統計数理研究所
上村 賢治	東京大学農学部	鎌倉 稔成	中央大学理工学部
魚井 徹	山之内製薬(株)	神尾 正巳	東京慈恵医科大学
鵜飼 保雄	東京大学農学部	仮谷 太一	川崎医療福祉大学
浦狩 保則	塩野義製薬(株)	川村 徹郎	鈴鹿医療科学技術大学
江口 真透	島根大学理学部	河井 浩	鐘紡(株)
大石 正平	科研製薬(株)	管家 英治	宇都宮大学農学部
大石 雅彦	(株)資生堂	管野 隆三	東京歯科大学
大内 幹夫	サントリー(株)	菊池 圭一	ブリストル・マイヤーズ スクイブ(株)
大隅 昇	統計数理研究所	菊地 正悟	順天堂大学医学部

岸野 洋久	東京大学教養学部	佐藤 喬俊	クイントイルズ・アジアインク
木村 清郎		佐藤 俊哉	統計数理研究所
木船 義久	武田薬品工業(株)	佐藤 昇	ファイザー製薬(株)
清見 文明	ヘキストジャパン(株)	佐藤 学	広島大学工学部
浄住 勤慈	大日本製薬(株)	佐藤 義治	北海道大学工学部
楠 正	東京大学医学部	澤 淳悟	マリオン・メレル・ダウ(株)
工藤 昭夫	兵庫女子短期大学	塩谷 実	明星大学
熊谷 明夫	東京田辺製薬(株)	塩見 正衛	茨城大学理学部生物学科
熊澤 蕃	日本原子力研究所	繁樹 算男	東京工業大学工学部
隅本 秀樹		篠崎 信雄	慶応義塾大学理工学部
栗木 哲	信州大学工学部	柴田 信明	岩手大学農学部林学科
栗林 和彦	塩野義製薬(株)	柴田 和博	北海道テクノロジー専門学校
栗原 律子	エーザイ(株)	柴田 義貞	(財)放射線影響研究所
巖 浩	(株)E P S 東京	渋谷 政昭	慶応大学理工学部
甲田 茂樹	高知医科大学	島崎 茂樹	三菱化成(株)
香田 繁	(株)生物科学技術研究所	島田 公	ゼネカ(株)
河野 和正	久留米大学商学部	嶋津 靖彦	水産庁研究課
河本 綏雄	東京理科大学諏訪短期大学	清水 邦夫	東京理科大学理学部
越水 孝	バイエル薬品(株)	清水 秀史	三井製薬(株)開発部
小谷 孝一	東京理科大学理工学部	志村 健一	琉球大学法文学部経済学科
後藤 昌司	塩野義製薬(株)	下郷 雅美	ノボノルディスク ファーマ(株)開 発部
後藤みづみ	吉富製薬(株)	庄武 孝義	京都大学霊長類研究所
小西 貞則	九州大学理学部	正法地孝雄	広島大学総合科学部
小林 康毅	帝京大学医学部	白石 高章	横浜市立大学文理学部数学教室
小林 龍一	桃山学院大学	白岩 直人	バイエル薬品(株)企画解析
駒澤 勉	統計数理研究所	白木原国雄	長崎大学水産学部
小松 勇作		新城 明久	琉球大学農学部
米虫 節夫	近畿大学農学部	新谷 茂	(財)日本中毒情報センター
小山 武信	和歌山県衛生公害研究センター	新藤 純子	農業環境技術研究所
近藤 貞昭	野菜・茶業試験場	新保 外志	富山県立技術短期大学応用数学科
近藤 久義	長崎大学医学部	神保 武夫	UNESCO
齊尾乾二郎		須川 和明	北星学園大学経済学部
佐伯圭一郎	文教大学教育学部	杉浦 成昭	筑波大学数学系
斎藤 弘	第一製薬(株)	杉田 稔	東邦大学医学部衛生学教室
酒井 清六	大東文化大学	杉森 俊彰	日本アイ・ビー・エム
酒井 弘憲	三菱化成(株)	杉山 高一	中央大学理工学部
坂口 紘治	九州大学経済学部	鈴木 和幸	電気通信大学
佐久間 昭	東京医科歯科大学難治疾患研究所	鈴木義一郎	統計数理研究所
佐々木 貴	ファルミタリア カルロエルバ(株)	鈴木 茂	JICA-INIA
佐々木秀雄	旭化成工業(株)	鈴木 智子	
佐々木義之	京都大学農学部	鈴木富佑加	鈴木病院
定村 薫	東京国際大学	鷺見 裕	栄研化学(株)
佐藤 邦弘	日本化学工業(株)	陶山 昭彦	鳥取大学医学部

関 利之	ワイス・エーザイ(株)	富沢 貞男	東京理科大学理工学部
惣田 隆生	塩野義製薬(株)	朝野 芳郎	エーザイ(株)
		富田 栄一	中外製薬(株)
高木 廣文	統計数理研究所		
高津 順吉	大洋漁業(株)	永井 武昭	大分大学工学部
高野 泰	東京大学農学部	永井 正規	自治医科大学
高橋 行雄	日本ロシュ(株)	中島 栄二	放射線影響研究所
高宮 陽一	(株)日本技術資料センター	永田 久紀	武庫川女子大学家政学部
滝沢 博	協和発酵工業(株)	中田 雅臣	大塚製薬(株)
田栗 正章	千葉大学理学部	長谷 文雄	日本ルセル(株)
竹内 公男	新潟大学農学部	永見 俊之	日本農薬(株)
竹内 啓	東京大学先端科学技術研究センター	中村 和雄	農業研究センター
竹澤 邦夫	農業環境技術研究所	中村 剛	長崎大学医療短期大学
武田 裕	大阪大学医学部	中村 典裕	秋田県立農業短期大学
竹網 正典	田辺製薬(株)	中村 靖彦	ソルベイ明治薬品(株)
田崎 武信	塩野義研究所	鳴島 睦子	(株)アジャスト
龍原 哲	東京大学農学部	西 次男	クインタイルズ・アジアインク
田中 和哲	(株)ミドリ十字	西尾 敦	明治学院大学経済学部
田中 純子	広島大学医学部	西岡 孝彦	信州大学繊維学部
田中 卓	広島大学原医研	西川 匡英	森林総合研究所
田中 健	(株)日本科学技術研修所	西川 浩昭	東邦大学医学部公衆衛生学教室
田中 豊	岡山大学教養部	西脇 茂利	(財)日本鯨類研究所
種村 正美	統計数理研究所	二宮 正士	農業環境技術研究所
玉井 康治	(株)CRC総合研究所	野口 岩男	昭和大学教養部
田宮 高紀	東京理科大学理工学部	野口 千明	東京大学医学部
田村 義保	統計数理研究所	野沢 昌弘	東京理科大学経営学部
垂水 共之	岡山大学教養部		
丹後 俊郎	国立公衆衛生院	拝野 克行	日本シェーリング(株)
辻岡 克彦	川崎医科大学	芳賀 敏郎	東京理科大学工学部
辻谷 将明	大阪電気通信大学	袴田 共之	農業環境技術研究所
津田 義和	立教大学一般教育部	橋本 修二	国立公衆衛生院
津谷喜一郎	東京医科歯科大学難治疾患研究所	橋本 哲男	統計数理研究所
椿 美智子	電気通信大学	橋本 敏夫	吉富製薬(株)
椿 広計	慶應義塾大学理工学部	長谷川政美	統計数理研究所
坪田 信孝	広島大学医学部	秦 正弘	鳥居薬品(株)
津村 善郎		畑村 又好	
出村 政嗣	大日本製薬(株)	鳩山由紀夫	衆議院議員
寺尾 哲	武田薬品工業(株)	馬場 康維	統計数理研究所
寺嶋 達雄	参天製薬(株)	浜田知久馬	東京大学医学部
寺西 孝司	塩野義製薬(株)	早川 式彦	広島大学原医研
土岐 恵美	萬有製薬(株)	林 邦彦	山之内製薬(株)
徳永 修	吉富製薬(株)	林 知己夫	放送大学
戸田 修二	エム・デー・エス(株)	樋口伊佐夫	帝京技術科学大学
百々 秀夫	大日本製薬(株)	菱沼 従尹	(財)寿命学研究会

兵頭 義史	岡山理科大学理学部	宮入加寿也	サントリー(株)
平岡 政隆	広島大学原医研	宮岡 悦良	東京理科大学理学部
平河 威	三井製薬工業(株)	宮川 強	東京理科大学理工学部
広岡 秀樹	山之内製薬(株)	宮川 三郎	北陸農業試験場
広岡 博之	龍谷大学経済学部	宮北 誠	国立栃木病院外科
廣沢 毅一	松本歯科大学	三輪 哲久	農業環境技術研究所
廣津 千尋	東京大学工学部	務中 昌己	広島大学原医研
福富 和夫		桃川 聖司	日本新薬(株)
藤井 良宣	宮崎大学教育学部	盛 昭雄	東レ(株)
藤川 裕之	明治製菓(株)	森尾 真介	鳥取大学医学部
藤越 康祝	広島大学理学部	森川 敏彦	武田薬品工業(株)
藤田正一郎	放射線影響研究所	守屋 和幸	京都大学農学部
藤田 利治	国立公衆衛生院		
伏見 正則	東京大学工学部	八坂 敏夫	PLメディカルデータセンター
舟喜 光一	持田製薬(株)	矢島 敬二	東京理科大学経営学部
古川 敏仁	(株)エスアールエル	柳井 晴夫	大学入試センター
古川 俊之	国立大阪病院	柳川 堯	九州大学理学部
逸見 功	東京都神経科学総合研究所	柳本 武美	統計数理研究所
細萱 茂実	山梨医科大学医学部	矢船 明史	北里研究所
細野 康彦	武蔵工業大学	山内 平介	大日本製薬(株)
堀内 徳高	中央協同組合学園	山岡 和枝	帝京大学法学部
堀江 正樹	農林水産技術情報協会	山口 直人	国立がんセンター研究所
本田 純久	長崎大学医学部	山口 行治	ダイセル化学工業(株)
本多 正幸	千葉大学医学部	山崎 秀夫	東京都立大学理学部
		山田作太郎	東京水産大学
前田 博	藤沢薬品工業(株)	山村 光司	農業環境技術研究所
前田 玲		山本 英二	岡山理科大学
牧野 国義	都立衛生研究所	山本 和子	福井医科大学医学部
牧野 弘志	第百生命保険相互会社	山本康次郎	東京大学医学部
増田 賢司	山梨学院大学商学部	山本 純恭	国際自然科学研究所
松井 研一	東邦大学医学部	山本 幹夫	総合保健研究所
松浦 正明	広島大学原医研	横田 嘉彦	ファイザー製薬(株)
松尾 良満	佐賀県農業試験場三瀬分場	横山 英明	自治医科大学
松岡 浄	藤沢製薬工業(株)	吉川 敬	NTT
松沢 照男	北陸先端科学技術大学院大学	吉澤 正	筑波大学大学院
松原 義弘	塩野義製薬(株)	吉田 彰夫	日本化薬(株)
松宮 義晴	三重大学生物資源学部	吉田 道弘	武田薬品工業(株)
松村 康弘	国立健康・栄養研究所	吉村 功	東京理科大学工学部
松本 幸雄	国立環境研究所	米澤 勝衛	京都産業大学国土利用開発研究所
三浦 幹彦	信州大学繊維学部		
光森 達博	鐘紡(株)	林 燦隆	National Taiwan University
三中 信宏	農業環境技術研究所		
宮井 俊一	東北農業試験場	和田 武夫	武田薬品工業(株)
宮井 正弥	姫路独協大学一般教育学部	和田 康彦	農水省畜産試験場

第2回計量生物セミナー開催のお知らせ

下記のセミナーを開催いたします。皆様ふるってご参加ください。

申し込み方法：往復ハガキに、参加者氏名、所属、連絡先住所、電話・FAX番号、「第2回計量生物セミナー参加希望」とお書きの上、返信用ハガキに返送先の宛名を書いて日本計量生物学会事務局まで送付してください。会場の都合で先着50名まで参加を受け付けます。結果は折り返し事務局から連絡いたします。

1. テーマ 医学と統計学の対話－用量反応情報をめぐって－
2. 日 時 1994年12月4日(日)午後1時-5日(月)午後3時
3. 場 所 富士教育研修所(静岡県裾野市下和田656番地)
4. 参加費 30,000円(宿泊費・食費含む)
5. 交 通 JR東海道新幹線三島駅より
タクシー20分、バス50分(1時間に1本)

4. オーガナイザー 魚井 徹 山之内製薬

口演者(五十音順)

医学・薬学 上田慶二 多摩老人医療センター

中野重行 大分医科大学

松尾博司 埼玉医科大学

安原 一 昭和大学

生物統計 大橋靖雄 東京大学疫学・生物統計学

丹後俊郎 国立公衆衛生院

吉村 功 東京理科大学工学部

製薬企業 前田 博 藤沢薬品

上坂浩之 ヘキストジャパン

第17回国際計量生物学会議(カナダ、ハミルトン)の報告

8月8日～12日、第17回国際計量生物学会議(IBC'94)が行われました。日本からは同伴者をいれて約20人が参加し、4件の研究発表が行われたほか、佐藤俊哉がCouncil meeting、丹後俊郎が次回のProgram Committee、吉村功がEditorial Advisory Committee(EAC)に参加しました。

Editorial Advisory Committeeはいわば編集顧問会議といったもので、今回の主要検討課題は、

①新しいモノグラフ・シリーズ(BMS)の編集方針、②新雑誌JABES(Journal of Agricultural, Biological and Environmental Statistics)の編集方針、③Biometricsの出版上の問題、④Biometric Bulletinの編集上の問題などでした。

①と②は、現在のBiometricsが数学的方法論と医薬関連論文多数派を占められていることに対する、疑問から出てきたものです。

前にも報告しましたが、欧米では環境・生態問題に対する危機感が日本よりずっと強く、これが「Biomtricsの本来の課題は数学的方法論ではなかったはずだ。医学、薬学は主要課題の一つではあるが、現在問題になっていることは、医薬関連の

行政的・政治的規制に関することが多く、これは本来の学問とは別の次元のことである。これがBiometricsの多数派という現象になっているのは望ましくない。意識的に環境問題、生態学、農学にたいする研究促進を図るべきだ。」という主張になっています。

具体的には、新しいモノグラフシリーズ(BMS, biometric monograph series)をIBS(国際計量生物学会)の主導で創設することと、新しい雑誌をASA(アメリカ統計学会)とIBSの共同編集で創刊しようという方針になったわけです。

BMSについては、6年任期で2年毎に2人ずつ交替のEditorial Advisory Boardを6人で作り、年1~2冊程度の発行を目指すことになり、候補者を出しました。日本からの候補者を含む20人くらいの候補者を出したので、近くEACでの推薦投票が行われる予定です。言語は英語ということでしたので、それなら英語の翻訳協力者がなければならない、という主張がヨーロッパから出ました。もちろん日本からもそれを強く主張しましたが、コストの関係で実現はむづかしいだろう、ということになりました。現在は出版社をどこにするか未定ですが、IBSが印税や編集権をどこまで主張するかは、交渉次第なので、EditorのNicholas Langeに詳細はまかされました。

②のJABESでは、数学的方法論と医薬関連を外し、応用を主にすることが認められ、現実例が扱われるもの、という趣旨が受け入れられました。しかし、今までのBiometricsにそういう趣旨の論文が投稿されたときどうするのか、medical application 関連の論文が投稿されたらBiometricsに回すのか、などBiometricsとの関連や、費用負担のASAとの分担のことなどが議論になりましたが、これはすでに編集委員会がASAと共同で作られていますので、それが解決する問題ということになりました。

③のBiometricsについては、採択率が25~30%なのに、すでに2号分の滞貨(backlog)があるのをどうするかが、問題になり、結局各号100頁の増頁でしのぐことになりました。費用はENAR(北米東支部)などにかかりを負担してもらおうことになりそうでした。(細部の議論はフォローしきれませんでした。)

④については編集者が印刷発送まで責任を持と

うとすると、編集が欧米に限られるので、編集責任と印刷・発送は別にせざるを得ない、ということになりました。

Council meetingはIBS会長、副会長、各委員会の委員長、Biometrics編集委員長、新雑誌JABES編集委員長、およびCouncil Memberで構成されています。主としてIBC'94中に開かれた各種委員会の報告が中心で、この場ではIBSの意志決定は行われません(正式な決定は全Council Memberによる投票によることが規約に決められています)。大きな議題は上記のEditorial Advisory Committeeからのもので、EACの勧告をそのまま投票にかけることになりました。そのほかの話題は、1995年がBiometrics発刊50周年であり、1997年が国際計量生物学会発足50周年であるので「平均をとって」1996年をIBSの50周年とし、Biometricsの特別増刊号を出すことになりそうです。また、AmsterdamでのIBC'96でも50周年記念の催し物を行う予定です。また、Amsterdamの次のIBC'98は南アフリカになる可能性が高そうです。

次回、第18回IBCはオランダのAmsterdamで1996年7月1~5日の会期で行われます。現在、招待セッションのテーマを募集しています。招待セッションについてアイデアのある方は、

丹後俊郎

1996IBCプログラム委員

〒108港区白金台4-6-1

TEL03-3441-7111

e-mail tango@iphth.go.jp

まで、セッションタイトル、オーガナイザー案、発表者案、それぞれの所属をお知らせください。

終わりに感想を言いますと、日本は金を出すけど主導権は取らない、という構造になっている、これでよいのだろうか、ということが気になりました。Biometricianが少なすぎるといえばそれまでですが。

吉村 功、佐藤俊哉、丹後俊郎

Biometricsの要約 (Vol.49, No.4)

"A Simple Generalization of the O'Brien and Fleming Group Sequential Test Procedure to More Than Two Treatment Groups (pp.1216-1219)"

K.-J. Lui

「O'Brien-Fleming群逐次検定法の3治療群以上への簡単な一般化」

長期臨床試験において、試験途中で中間解析を行うことがある。多数回解析するので、各中間解析に当たってP値の調整が行われる。その際、よく用いられているのがオブライエン・フレミング法であろう。本論文では、2群を多群に拡張するための方法を提示した。そして、シミュレーションにより、中間解析数=1~10回、比較群の数=2~10での5%および10%有意水準に対応する臨界値を示した。本研究のポイントは、3群以上に拡張する際に、直交対比行列を用いていることであろう。直交行列は、関心のある群間比較をイメージして作ることもよい。K治療群の場合には、2×K直交対比行列を用いて統計量を構成するようになっている。それによって、最終的に2群比較の形に集約される。

折笠秀樹（自治医大大宮医療センター）

Biometricsの要約 (Vol.50, No.1)

"Weighted Least Squares Analysis of Repeated Categorical Measurements with Outcomes Subject to Nonresponse (pp.11-24)"

S.R. Lipsitz et al.

「欠測データを含む繰返し観察された分類データの重み付き最小二乗法による解析」

本論文では、追跡中のある時点で観察が行われなかった個体を含むような場合での、繰返し観察される分類データを解析するための2段階重み付き最小二乗法について述べている。

反応に欠測をもつ繰返し観察データの解析での他の最小二乗法については、既にKoch, Imrey, and Reinfurt (1972) と、Woolson and Clarke

(1984)により提案されている。しかし、Rubin (1976) が述べているように、これらの方法は、反応の欠測が完全にランダムに起きる時 (MCAR) に、一致推定量を与える。

今回提案した2段階法では、欠測のランダム性についてより弱い仮定であるMARのもとでも一致した結果を与える。今回提案した方法を、前述の2つの最小二乗法と比較している。

林 邦彦（山之内製薬）

"Analysis of Factorial Survival Experiments (pp.25-38)"

E.V. Slud

「要因実験での生存時間解析」

ランダム化臨床試験で2×2要因実験が用いられる理由は、2つの実験を1つで済ます経済性にある。本論文では生存時間の2要因実験から起こるいくつかの新しい方法論的な問題を、2つの2値治療変数を含む比例ハザードモデルの漸近論を用いて議論する。その問題とは、正しい帰無仮説と対立仮説の定式化、ログランク検定、調整ログランク検定、層別ログランク検定のどれを選ぶか、それぞれの治療の主効果の検定統計量間の漸近相関、主効果と交互作用の検定の漸近的な検出力、2×2要因実験と3グループ比較（両方の治療を同時に受ける患者はいない）との主効果の検出力の比較、そして、倫理的な理由から一方の治療を早期に中止した場合に起こる解析上の問題、である。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

"Slope Estimation in the Presence of Informative Right Censoring: Modeling the Number of Observations as a Geometric Random Variable (pp.39-50)"

M. Mori et al.

「ランダムでない右側打ち切りがある場合の変化率の推定：観察回数を幾何分布としたモデル化」

各対象者に対する測定回数が反応変数のレベルに依存して変化すると仮定される、不完全な経時的データからの変化率の推測に対してある方法を提唱する。提唱する方法はrandom slope modelを

含み、測定回数が幾何分布としてモデル化されている。ここで、幾何分布の平均は各対象者の変化率に依存する。この方法はinformative right censoringを補正し、集団の傾き同様、各対象者の傾きの測定値も与える。Noninformative right censoringの下、これらの傾きの測定量はベイズ推定量 (Fearn, 1975) に等しい。打ち切り過程がinformativeである場合に提唱する推定量が傾きの重みなし、および重み付き推定量と比べてより効率的であることをシミュレーションにより示す。この方法を腎移植のデータ解析により例示する。

井村伊久子 (東大疫学・生物統計学)

“Small-Sample Study of an Efficient Estimator of the Odds Ratio Under Multiple Matching (pp.140-148)”

P. Sasieni

「多重マッチングした場合のオッズ比の有効推定量の小標本での研究」

モンテカルロ実験を用いてオッズ比の推定量の族の小標本での性質を研究する。新しい漸近的に有効な推定量が、Mantel-Haenszel推定量や他のiterationの必要のない推定量よりも、広い状況でよい挙動を示すことが示された。

注：著者は条件付きオッズ比の推定量を重み付きの推定方程式の形で表し、その重みの違いによって、MH推定量、他のnoniterative推定量、提案する推定量を定義し、その小標本での挙動をsimulationを用いて調べている。

山本精一郎 (東大疫学・生物統計学)

“Two Random Effects Models for Multivariate Binary Data (pp.164-172)”

B.W. McDonald

「多変量二値データに対する二つの変量効果モデル」

周辺成功確率が等しくないような場合に多変量二値データに対する二つの回帰モデルを考える。最初のモデルは確率スケールで作用する加法変量効果に基づいている。二番目のモデルはロジットスケールで作用する離散変量効果を仮定する。従

って、回帰パラメータの解釈は二つのモデルで異なる。これらのモデルを歯のデータに応用する。

松山 裕 (東大疫学・生物統計学)

“Intraclass Correlation for Two-by-Two Tables Under Three Sampling Designs (pp.183-193)”

C.A. Bodian

「3つのサンプリングデザインから得られる2×2表に対する級内相関」

n人の対象に関する2つの2値分類の間の一致を評価するためのいくつかのサンプリングデザインから得られるデータは2×2表の形で表せるデータとなる。Kraemer (1979) の方法に従うと、1元配置ランダムデザイン、2元配置混合デザイン、2元配置ランダムデザインに対して、連続データと同様に2値データに対してもpopulationモデルを考えることができる。3つの各モデルに対して、級内相関を表すパラメータが定義され、2つの推定量が提案される。1つは、2値データに対してANOVA-typeの表を構成するものであり、もう1つは最尤法によるものである。2元配置混合デザインに対する級内相関の最尤推定量はファイ係数と同じである。ある程度サンプルサイズが大きい場合、2元配置ランダムデザインに対するANOVA推定量はCohenの κ 統計量の近似になっている。

周辺が対称 (marginal symmetry) な表に対しては、推定量間の違いはほとんどないことが、比較によって示された。推定量間の違いは、周辺の非対称性が増加するか、または、平均prevalenceが.50に近づくに従って増加する。

小田英世 (東大疫学・生物統計学)

“Models for Three-Dimensional Contingency Tables with Completely and Partially Cross-Classified Data (pp.194-203)”

G.D. Williamson and M. Haber

「不完全データを含む3次元クロス表のモデル」

我々は、1つの基準変数と2つの説明変数からなる3次元クロス表が不完全データを含む場合のモデルを開発した。興味のあるパラメータはセル確率と一つまたは二つの説明変数が欠測となる確率である。提案するモデルは、これら2組の確率

に関する推測を独立に行うことを可能にする。これらのパラメータの推定と仮説検定のための最尤法を、簡単な加法性を持つ条件付き適合度検定統計量とともに述べる。提案する方法をGeorgia州Atlantaで実施された子宮頸がんのケース・コントロール研究に適用する。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Estimation of the Infection Time and Latency Distribution of AIDS with Doubly Censored Data (pp.204-212)”

G. Gomez and S.W. Lagakos

「2重打ち切りデータを含むAIDSの感染時点と潜伏期間の分布の推定」

HIV（AIDSの原因ウイルス）感染時点およびAIDSの潜伏期間（HIV感染時点からAIDS発病時点までの期間）の分布の推定を考える。感染時点のデータが感染前と感染後の時点という区間で得られており、発病時点のデータには中途打ち切りが含まれている。このような状況において、感染時点と潜伏期間の分布のノンパラメトリックな推定方法をDe Gruttola and Lagakos (1989) が提案しているが、彼らの推定方法は、両者の分布を同時に推定するために、計算時間を要すること、初期値設定が難しいこと、および、少数例では推定困難という問題がある。ここでは、計算が容易で、そのような問題のないノンパラメトリックな推定方法を与える。

まず、感染時点の分布を、感染時点の区間データから周辺尤度により推定する。次いで、潜伏期間の分布を、感染時点の分布の条件付き尤度により推定する。発病時点のデータにも感染時点の分布に関する情報が若干含まれているので（たとえば、感染時点の区間の直後に発病していれば、実際の感染時点は区間の小さい方の確率が高いなど）、本推定量は彼らのそれよりも効率が劣るが、実際のデータ例では、両者はきわめて類似した結果を与えた。

橋本修二（国立公衆衛生院）

“Association Between Survival Time and Ordinal Covariates (pp.213-219)”

C.T. Le et al.

「生存時間と順序のある共変量との関連性」

生存時間と順序カテゴリの共変量との独立性を検定するために、順位相関を応用することを提案する。検定統計量は各死亡時刻での「一致ペア数-不一致ペア数」を全死亡時刻ごとに足し合わせたものである。この統計量は比例ハザードモデルの枠の中でスコア統計量として表現することができる。提案する検定は、その特別な場合として順序をもつ対立仮説に対するJonckheere検定の一般化を含み、また関連性の指標はMantel-Haenszelの方法の一般化にもなっている。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Model Selection for Multivariate Regression in Small Samples (pp.226-231)”

E.J. Bedrick and C.-L. Tsai

「小標本での多変量重回帰分析におけるモデル選択」

本論文は、多変量重回帰モデルにおける変数選択に関するもので、推定されたモデルの対数尤度のバイアス（情報量基準の枠組みで）の精密な値を求めることを目的としている。これによって、漸近的なバイアス補正を行ったAICより有効な変数選択基準が得られたことを強調している。しかし、この結果はすでにSugiura (1978, Communications in Statistics-Theory and Methods, A7,13-26) により与えられており、本論文のオリジナリティには疑問がある。

小西貞則（九州大学理学部）

“The Performance of the O’Brien-Fleming Multiple Testing Procedure in the Presence of Intraclass Correlation (pp.232-236)”

K.-J. Lui

「個体内相関が存在する場合のO’Brien-Fleming多重検定法の挙動」

長期臨床試験で中間解析をするとき、P値を調整する方法としてオプライエン・フレミング法が知られている。この方法では、各被験者のすべてのレスポンスは独立である（さらに2値レスポンス）と仮定している。しかし、現実のデータでは

独立性の仮定が怪しい場面が見られるという。つまり、被験者内での内部相関を認めることが必要である。内部相関を取り入れたうえでシミュレーション研究を行った。その結果、オブライエン・フレミング法をそのまま適用すると第一種の過誤が上昇することが示された。それは、中間解析回数が増えるにつれ、またレスポンス率が高くなるほど上昇した。(内部相関の値別の数値表が示されていないので、直観的につかみにくい。)

折笠秀樹 (自治医大大宮医療センター)

“A Bayesian Analysis of Institutional Effects in a Multicenter Cancer Clinical Trial (pp.244-253)”

R.J. Gray

「多施設癌臨床試験における施設影響のベイズ的解析」

この論文ではベイズ法を用いて打ち切りのある生存時間をエンドポイントとした多施設臨床試験における施設間差を定量的に評価する。比例ハザードモデルにおいて施設影響をモデル化するために階層的構造を用い、その事後分布はGibbs Samplingによって求めた。Eastern Cooperative Oncology Groupによって行われた肺癌の臨床試験のデータにこの手法を適用した。この臨床試験では施設間で治療効果にかなりの変動が見られたようである。これに対する原因は同定できなかったが、極端な効果を示した施設からのデータを詳細に吟味することによって治療の施設間差をさらに検討することが可能になるだろう。

松山 裕 (東大疫学・生物統計学)

“Bayesian Estimation for the Three-Parameter Weibull Distribution with Tree Diameter Data (pp.254-269)”

E.J. Green et al.

「3母数ワイブル分布のベイズ推定」

3母数ワイブル分布は、森林の樹木の直径のモデルとして一般に使用されている。本論文では、尤度プロフィールによって若年時の樹木のデータにおいて、最尤推定はしばしば位置母数の推定値が負になるため不適当であることを示している。ここでは、3種類のデータに対してベイズモ

デルを提案しそれをGibbs samplerによってあてはめている。このモデルは実際に適用しやすく、位置母数の推定値は必ず正になる。ここで示すベイズモデルは一つのデータに対しては適切でないが、残りのデータに対しては適切であることを示している。また、サンプリングーリサンプリング手法によって一つのデータに対するモデルのあてはまりの悪さの原因は、尤度つまりワイブル分布をこのデータにあてはめることから生じ、事前分布によるものではないことも示している。

一般に、ここで論じられている様な分布において、分布の原点が零から始まる通常の2母数の場合と違い分布の原点を未知にする、つまり位置母数をモデルに導入すると、本論文での問題以外の点でも最尤推定は大変である。例えば、対数正規分布、ガンマ分布およびワイブル分布においてはデータの最小値を位置母数の推定値として最尤推定値の計算過程で近づけて行くと尤度は無限大になる現象を生じる。この様なことを避けるための一手法としてもベイズ的アプローチは有効であるかもしれない。

金藤浩司 (統計数理研究所)

“Performance of Generalized Estimating Equations in Practical Situations (pp.270-278)”

S.R. Lipsitz et al.

「実際の状況におけるGeneralized Estimating Equationsの挙動」

繰り返し観察された2値反応をとる変数を解析するためのモーメント法がLiang and Zeger (1986)により提案され、Prentice (1988)により拡張された。彼らの提案したGEE (generalized estimating equations)においてLiang and Zeger, Prenticeは、2値反応をとる変数の個人ベクトルの期待値に関連をもつパラメータと反応変数間の相関を推定している。本論文において一段階推定量、つまりgeneralized estimating equationsの解を得るために用いるFisher scoringアルゴリズムの1回反復により得られる推定量について議論する。そしてサンプルサイズの小さい場合におけるfully iterateされた推定量の挙動と比較する。シミュレーションにより一段階推定量の挙動はfully iterateされた推定量と質的に同一であることを示

す。サンプルサイズが小さく2値反応間の相関が高い場合には、fully iterateするGEEアルゴリズムにおける収束の問題を回避するために、一段階推定量を使用することを推薦する。さらに時間依存性共変量の効果の推定に対しては、分散を補正した通常のロジスティック回避よりもGEEの方法は効率が高いことを示す。

村上義孝（東大疫学・生物統計学）

1994年度 第2回理事会議事録

日時：1994年4月4日（月） 午後6時～8時

場所：私学会館アルカディア市ヶ谷

出席者：駒澤（会長）、魚井（会計）、高木（庶務）、佐藤（喬）（会計補佐）、上坂、鶴飼、奥野、岸野、佐久間、佐藤（俊）、正法地、丹後、椿、吉村（以上、理事）、芳賀（監事）、栗原（事務局）

議事次第

1. 第1回理事会議事録の確認：前回の議事録について報告があり、承認された。
2. 1994年年会プログラムについて：上坂企画理事から本年度の年会プログラムについて報告がなされた。特別セッションについては、鶴飼理事から主旨説明があり、特別講演については岸野理事から説明がなされた。
3. 1993年度決算報告および監査報告：佐藤（喬）会計補佐から前年度の決算報告があり、芳賀監事から監査上問題はない旨の報告がなされた。
4. 1994年度予算案：魚井会計理事から本年度の予算案についての説明がなされ承認された。年会に関する予算を別枠にすること、年間50万円程度の赤字となるので、本年度および来年度は会費の値上げは必要ないが、来々年度以降は値上げの必要があることが報告された。
5. 次期理事選挙に関して：従来よりも理事選挙の次期を早め、12月中に新旧理事会議を開き、1月から新理事による学会の運営を行いたいとの駒澤会長からの主旨説明があった。このためには、「日本計量生物学会役員選出に関する細則」の6条、9条、および14条を修正する必要があるが、高木庶務理事が修正案を作成し、本年度の総会へ図ることとなった。
6. IBSについて：学会の英語名がInternational

Biometric Society へと変更された。また、先の選挙で、日本支部からは佐藤（俊）理事が新しいCouncil memberに選ばれた。

7. 会長の任期について：IBS本部から、支部の会長の任期を2期4年を越えないように、会則を変更し、英文の会則を本部に送るよう、通達があった。これに対応するためには、会則13条と英文会則4条の修正が必要であり、修正案を総会へ図ることとなった。
8. 統計関連連合大会実行委員会について：椿理事から応用統計学会との間の「覚書」について説明がなされた。両学会で年会を連合して行うことに関しては賛同が得られた。しかし、他の統計関連学会への参加呼びかけについては、生物系等の非統計関連研究者が入会しなくなる懸念があるのではないかと意見もあり、学会の連合に関しては今後継続的に検討することとなった。
9. 雑誌の発行について：丹後編集理事から、Japanese Journal of BiometricsのVol.15が発行されるとの報告がなされた。

1994年度 第3回理事会議事録

日時：1994年4月22日（金） 12時～12時55分

場所：統計数理研究所 会議室

出席者：駒澤（会長）、魚井（会計）、高木（庶務）、佐藤（喬）（会計補佐）、上坂、鶴飼、大橋、奥野、折笠、岸野、佐久間、佐藤（俊）、柴田、正法地、丹後、椿、橋本、柳川（以上、理事）、栗原（事務局）

議事次第

1. 第2回計量セミナーについて：上坂理事から、第2回計量セミナーは臨床と生物統計の2本立てで実施する計画であると説明があった。時期については10月末～11月上旬となるが、応用統計学会との共催が可能かなど、実行委員会で検討することになった。
2. 次期理事選挙管理委員について：次期理事選挙の選挙管理委員は、金藤浩司氏（統計数理研究所）と矢船明史氏（東京大学）に依頼することとなった。
3. 次期年回の特別セッションのテーマについて：来年度の年会の特別セッションのテーマと

して「環境問題」がよいのではと上坂理事より提案があった。多くの学会等で扱っているのに、他のテーマではとの意見もあり、今後検討を継続することになった。演者の人選等の問題もあり、テーマの選定を早期に行うこととなった。また、来年度の年会の会場に公衆衛生院の講堂がよいのではとの意見があったが、これについても検討することになった。

4. 統計関連連合実行委員会について：応用統計学会との統計関連連合実行委員会への出席者は、三役と企画担当理事を基本とするが、討議内容に応じて他の理事なども参加することにした。
5. 次期学術会議統研連委員について：学術会議の統研連の委員（現在、柴田理事）が10月20日で任期が満了するので、次期委員を選出する必要があるが、会員での選挙は行わず、理事会で選出することになった。
6. 会費の値上げについて：今後、本部での会費値上げに対応できるように、会費の値上げを行う場合の規則を明確に定めるべきではないかとの意見があった。
7. 本部への報告について：柳川理事よりBulletinへ、本年会の英文サマリーを報告するが、必ず住所を記載して欲しい旨、要望があった。また、日本支部による3,000ドルの途上国援助についても報告する。
8. 次回理事会：次回の理事会は、7月25日（月）の昼食時に都市センターで行う。

関連学会等のお知らせ

第16回癌の生存時間研究会

「癌臨床試験のガイドライン」, 「癌治療に関するQOLと医療経済」, 「臨床試験方法論の進歩」を主題として開催します。

日 時：1994年12月10日（土）

場 所：大宮ソニックシティ・小ホール

連絡先：折笠秀樹

〒330大宮市天沼町1-847

自治医科大学附属大宮医療センター

TEL 048-647-2111

FAX 048-648-5447

第5回日本疫学会総会

日 時：1995年1月26日（木）-27日（金）

場 所：日本生命中之島研修所

参加費：5000円

連絡先：第5回日本疫学会総会事務局

〒537大阪市東成区中道1-3-3

大阪府立成人病センター集検1部内

TEL 06-972-1181内2514

FAX 06-981-5197

Japanese Journal of Biometricsへようこそ！

本学会雑誌であるBulletin of the Biometric Society of Japanの名称がVol.13から「Japanese Journal of Biometrics」へと変わり、体裁、内容も少々新しくなりました。その主なねらいは、会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすことにあります。そのため、投稿原稿の種類を次の5種類としました。

1) Original Articles（原著）

計量生物学 (Biometrics) 分野での諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2) Reviews（総説）

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その将来への課題、展望についてまとめたもの。

3) Preliminary Reports（研究速報）

原著ほど、まとまっていない、あるいは、独創性ははっきりしないが、なんらかの創意工夫がこらされているもの。また、年会で発表された論文（招待講演、一般講演とも）で、原著として投稿するほどまとまっていないもの。

4) Consultant's Forum（コンサルタント・フォーラム）

会員が現実に関面している具体的問題の解決法、または、新しい方法論を開発した会員がその適用場面を模索する、などに関する質問。編集委員会はそれを受けて、適切な解答例を提示、または、討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時に匿名も可とする。

5) Letter to the Editor（読者の声）

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

この中で、特にPreliminary Reportsについては、未完成の論文掲載を目的として、「とりあえず、preliminary reportとして報告しておき、後に改訂して、他雑誌（Biometricsなど）」へ投稿したい」と考えている会員のために設けたものです。また、Consultant's Forumは、現実問題を通して、アプローチの方法、解決方法の模索など、会員相互間の交流の場として、活発に利用されることを期待して設けたものです。

ただ、本学会は、International Biometric Societyの日本支部としての性格上、記事のタイトルはこれまで通り英文で統一することになっていますが、本文は和文、英文いずれでも構いません。なお、投稿に際しては、新しく改訂となった投稿規定、原稿作成要領（Vol.13, No. 1 から）を参照して、学会事務局編集委員会宛お送り下さい。

Japanese Journal of Biometrics 編集担当理事
丹後俊郎

新雑誌JABESへの投稿のお誘い

新雑誌Journal of Agricultural, Biological and Environmental Statistics (JABES) がAmerican Statistical Association と International Biometric Society との共同編集で1996に刊行されます。JABESは、農学、バイオテクノロジー、環境資源などの生物科学の諸分野への統計を強調します。投稿規定等は、下記までご連絡ください。

Dallas E. Johnson, Editor
Department of Statistics
Kansas State University
Dickens Hall
Manhattan, KS66506-0802
U.S.A.
e-mail: DEJOHNSN@KSUVM.ksu.edu

会計理事からのお知らせ

1995年度の会費の納入をお願い致します。本学会の会計年度は国際計量生物学会の会計年度に合わせて1-12月です。B会員およびC会員に対して、一カ年会費を未納にした会員は規定に従い雑誌Biometricsが届かなくなります。本学会の運営を健全にするためにも、これまでに会費を未納にしている会員は、本年分と合わせ至急会費をご納入下さるようお願い致します。

開発途上国援助のための「特別会費」は、会費に2,000円上乗せをお願い致します。なお、特別会費を送金される場合にも通常の会費納入口座を利用し、特別会費であることを通信欄に明記して下さい。詳しくは、ニュース・レターNo.48巻頭言をご覧ください。

会 費	1992年度	1993年度
A 会員	3,500円	3,500円
B 会員	8,000円	8,000円
C 会員	4,500円	4,500円
特別会費*	2,000円	2,000円

* A, B, C, 会員会費に2,000円上乗せして下さい。

郵便振替口座：変更がありました

00150-2-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座：

第一勧業銀行飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会

または、

三和銀行 飯田橋支店

普通 624-3596166

日本計量生物学会

会計担当理事 魚井徹、佐藤喬俊

事務局からのお知らせとお願い

学会への連絡，問い合わせ等は下記事務局まで
お願いします。

また，所属，連絡先等に変更のあった会員の方
は，事務局まで御一報下さい。

ニュース・レター編集委員会からの お願い

編集委員会では会員からの原稿を募集していま
す。国内・国外での関連学会への参加報告や印象
記，海外での研究・活動状況などの報告を歓迎し
ます。

Biometricsに掲載された論文の日本語要約は会
員の方々のボランティア活動に依存しています。
編集委員会から要約の依頼がありましたら，ご多
忙中とは思いますが，御協力を宜しくお願い致し
ます。

日本計量生物学会事務局 〒106 東京都港区南麻布 4-6-7 統計数理研究所駒澤研究室内 TEL 03 (3446) 1501 栗原恵美子	編集委員会 佐藤俊哉，橋本哲男 〒106 東京都港区南麻布 4-6-7 統計数理研究所 TEL 03 (3446) 1501 FAX 03 (3446) 1695
---	--